

「移住労働者およびその家族の言語習得：日本のあるインドネシア人コミュニティにおける事例」

福岡女子大学国際文理学部 吹原 豊

現在までおよそ 8 年間にわたって、茨城県にあるインドネシア人コミュニティでのフィールドワークを続けています。調査の主な目的は同コミュニティにおける日本語習得の実態を明らかにすることです。フィールドに入った当初、同国人や日本人から日本語が上手だという評価を得ている人に会って話をしてみると、ある程度の口頭コミュニケーション能力はあるものの、その日本語はかなり不正確であり、文法・語彙の知識が低いレベルにとどまっていることが分かりました。調査を重ねるとこの傾向はさらに確かになり、中には 10 年以上の滞日で毎日日本人と一緒に仕事をしているにもかかわらず、単語を並べるだけのコミュニケーションしか取れない人が数多くいるということが分かりました。こうした予備調査を出発点として、以下の 2 点に着目して同地域のインドネシア人移住労働者の日本語習得の実態について調査を行いました。

- (1) インドネシア人移住労働者の日本語能力の実態についてその全体像を明らかにする。
- (2) コミュニケーション上の困難に直面した場合の乗り越え方について調べる。

これまでに予備調査を出発点にインタビュー調査、参与観察、OPI(Oral Proficiency Interview)を行ってきましたが、今回はOPI調査の結果の概要と参与観察の結果の一部についてご紹介したいと思いますⁱ。

また、同コミュニティにおいて、近年、出産をはじめ、国に残してきた子どもの呼び寄せが多くみられるようになってきました。そして、その結果、子どもたちの言語習得に関連するさまざまな問題がみられるようになってきました。報告者はそれらを滞日インドネシア人児童生徒のバイリンガル化に関する問題であるにとらえ、現在までに同地域の小中学校に在籍する全児童生徒を対象にした調査を継続中です。まだ、予備的調査の段階ですが、この調査の過程で分かってきたことについてもご紹介したいと思います。

ⁱ 日本でのフィールドワークに並行して、2008 年から韓国のインドネシア人コミュニティにおいての調査も開始して現在に至っています。言語的類似性や社会文化的背景、外国人受け入れ政策の相違などの観点から日韓両国におけるインドネシア人社会のありようの違いに関心を持つようになったからです。時間が許せば日韓両国におけるインドネシア人コミュニティのありようの違いについて、移住労働者の言語習得を中心にして考察した結果についてもご紹介したいと思います。